

Degeneration and / or Regeneration

河内 恵子
(慶應義塾大学助教授)

文学史の読み直しが始まっている。Oscar Wilde が生きた後期ヴィクトリア朝時代を1990年以降出版された、文学史や文化史を通して再検討してみよう。

後期ヴィクトリア朝文学や世紀末文学研究には 'decadence' 'dandyism' 'art for art's sake' といった言葉が付きまとうが、これらの言葉に振り回されたり、呪縛され続けている、文学史の新しい読みは期待出来ない。世紀末という時代を表現する為の新しい code を提起している文献を挙げる。

- Beckson, Karl. *London in the 1890s* (London: Norton, 1992).
- Craft, Christopher. *Another Kind of Love* (London; University of California Press, 1994).
- Dowling, Linda. *Hellenism and Homosexuality in Victorian Oxford* (Ithaca: Cornell University Press, 1994).
- Greenslade, William. *Degeneration, Culture and the Novel 1880-1940* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994).
- Fone, Byrne R. S. *A Road to Stonewell 1750-1969* (New York: Twayne, 1995).
- House, Simon. *Fin de Siecle* (Suffolk: Barnie and Jenkins, 1992).
- Jordan, John O. & Patten, Robert L. (eds.). *Literature in the Marketplace* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995).
- Kopelson, Kevin. *Love's Litany* (California: Stanford University Press, 1994).
- Ledger, Sally & McCracken, Scott. (eds.). *Cultural Politics at the fin de siècle* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995).
- Pykett, Lyn. *Engendering Fictions* (London: Edward Arnold, 1995).
- Stokes, John. (ed.). *Fin de Siècle/Fin du Globe* (London: Macmillan, 1992).
- Trotter, David. *The English Novel in History 1895-1920* (London: Routledge, 1993).
- Walkowitz, Judith R. *City of Dreadful Delight* (London, Virago, 1994).

これらの文献が各々提起する codes を検討しながら、後期ヴィクトリア朝時代を考察するのが現在の私の仕事である。

Max Nordau がその著 *Degeneration* (1920) において、Ibsen, Wagner, Wilde, Nietzsche, Tolstoy といった人々を 'cultural decadence' の象徴的存在ととらえているのは周知の事実であるが、それは、彼らが生きた19世紀後半という時代の負の部分にのみ Nordau が着目しているからであろう。確かにこの時代の暗い影は濃い。イギリスを例に取ってみよう。1870年代から90年代にかけての不景気は多くの失業者を生み、大都市では、スラム街が増え、凶悪な犯罪が多発した。まさしく "cities of dreadful nights" の出現である。こういった暗い背景の中で、例えば Oscar Wilde のように、自由に自らの生と芸術を追求していた人物は反道徳的なデカダントと見えたであろう。しかし、視点を変えれば、G. B. Shaw が指摘したように、Nordau が批判した芸術家たちは "degeneration" に苦しんでいたのではなく "regeneration" の精神を体現していたと言える。すなわち、時代の pessimism に埋没することなく、内なる自由な芸術性を通して時代の positive energy を創り出していたのだ。

Darwinism を例にとってみよう。進化論をキリスト教に対する脅威と見なし、終末論へと直線的に突き進む pessimist もいれば、これを人間肯定主義と受け取め、人類の未来に希望を抱く optimist もいた。後期ヴィクトリア朝時代はまさしく、さまざまな場面でこのような二項対立的イデオロギイがせめぎ合った時代であった。またこの時代には "the new" という形容辞を付された現象が数多く現われた。"the new Woman" "the new Journalism" "the new Imperialism" "the new Criticism" "the new Hedonism" "the new Paganism" etc. といった具合である。各々の "the new ism" に対して、肯定的見解は多く出たが、当然のことながら否定的見解も決して少なくはなかった。

女性の自立や社会進出を高く評価する人々にとって、いわゆるヴィクトリア朝の価値観に左右されない "the new Woman" の出現は刺激的であった。しかし、保守的な人々にとっては、彼女らの存在は、社会の道徳律をかき乱し、イギリス国民を墮落へと誘う "decadent" そのものであった。大英帝国の弱体化を促進させる "decadent" と定義付けられたのは "the new Woman" ばかりではない。同性愛者も唯美主義者も精神病患者も同様に見なされていた。Oscar Wilde も然りである。

しかし、各々の code に賛否両論の意見があるのと同じように、Oscar Wilde という cultural code に対しても二項対立的な見解は数多く提出されている。多様な見解を、新しい文学史や文化史を媒介にして分析してゆく世紀末研究は始まったばかりである。多様なイデオロギイを自らの人生と芸術において表現した Wilde は、degeneration and / or regeneration という問題を解く重要な鍵である。